

小特集「元号を考える」

年月を表象する意図および元号の意味をめぐって

マルクス・リュッターマン

言葉は相互に意図を合わせる媒介であるはずなのに、解釈の地を余す。曖昧さも精密さもよく指摘される。意識媒体（メディア）たる記号は世の、また宇宙までの生活環境の移り変わりを反映し、しかも独自にも多くの思いを造出する中、曖昧及び精密の両義を運ぶ。したがって人界での「意」を「理解」する為には魂のキネマティクスを学ぶ術を開発せざるに通れない。勿論、時号の学びも同前。

漢の建元、満州国の康德、大韓帝国の光武、そして日本国の大化、明治、平成など。年号も解釈の地を余す。文字、絵、その他の諸々の史料（言語、音楽、道具など）のように年号自体も意を語らない。我々は問いかけてから初めて答えを得る。

年号は典拠不明も少なくないが、はっきりしても、その意味は曖昧のままが多い。例えば一九八九年から「平と成す」か「平らになる」かといった風の議論は絶えない。中国の典拠もいくつかの候補がある。しかし、冒頭で言ったように、本来は明快に宣言したはずであった名称が精密さに欠ける逆説的な性質は「不自然」ではない。春にては小鳥のように、秋にては虫のように、共存の生物の間では同調が測れるもので、既存のものではない。バイオリンがピア

ノに接して、先づは調律し音程や節を定める。男が女を求めて、長く呼び続け、すなわちヨバイ（呼ばひ）をする。暦、時計、年号などの時号もまた農業をはじめとして、生活をチューニング。私達の思念も言動も曖昧さと調律の間に揺れる。この性質こそは対応性を保証し、いわば変わりやすい環境への適応性を保存しているかもしれない。

ハンス・ファイヒンガー (Hans Vainiger 一八五二—一九三二) の提唱した「かのように」に従えば、受信したデータをいわば「そのまま」には念頭に藏せず、むしろ記憶は常にダイナミックに過渡して、数式にあるようなイコールの左右に妥当なものを彷彿させようと置き換えを繰り返す。対して、天台智顛（五三八—五九七）講義集によれば意識の移り変わりはむしろ苦悩の元であるという。そのタイトル『摩訶止観』に端的に求められている通り、受信したものと及びそのデータによる衝動をいかに鎮めうるかという大義を取り上げる。結局のところ、鎮めについては言葉が足りなく、醍醐味へ直線の案内も能わず。禅の公案の如く、伝承上でジレンマに陥りながら悟りを待つ。

学問でも、矛盾を原動力としている。矛盾とこそぶつかれば、議論が解消に向かう。ところが、矛盾を解いても、徹底的な悟りを拒んでいる。大概、認識の賞味期限は醍醐味のほど永いものでありえない。学問のみならず、文化という現象も輪廻のように絶え間なく置き換えられる。大自然の経過中の一コピーとして我々人間の意識が現れ、何重もの構成をなし、シグナル受信の五感、その骨、気管、脈管、神経の迷路を始め、ニューロン発火まで「置き換え」が生じ、連動し、発達する。そして、無形の精神を反映する表意に動作の以心伝心、歌の情緒、音楽の感性、絵画の美観、図録の気鋭さ、文章の細かさあり。楽譜、図録、そして「置き換え」の王冠とも称すべき「文字」がそれを支える。風景を描写し、さえずりを真似て、谷川の

せせらぎを響かせ、翁を眩かせ、子のワイワイガヤガヤまで写す。数式だけでは叶わない、最も人間らしいメディアにもっぱら言語が同調を計っても、訳さなければ通じない。この困難さはファイヒンガーの提唱した「かのように」によってうまく表現されたと、私は思う。

智顛はこのことを承知の上、苦悩の原因とみなし、克服を止観に求めた。移り変わりの激しい衝動を司れば、救われよう。牛を乗りこなす農夫のように、あたかも御者のごとく。身さえ修めれば良い。しかし同時に、個人の選ばない親、選ばない言語環境、選ばない情緒、選ばない感性、選ばない風景による制限、体や、能力のような有限の要素とも付き合わざるを得ない。ひいては条件と先天とに対処するうちにまた拘束ばかりされてはいないと気づく。そこで修練、昇華、演習などを心がければ、「かのように」の記号に満ちた選択肢が浮かんでくる。自身を指南すれば既往のスジから脱線も、あるいは転換もするかも知れないが、いわゆる「自由」に恵まれるようだ。先天と自由との間では目標や理想が率いている意図性に人間文化の根元が求められる。人類は自然科学と文化学との狭間を見抜けなければ御者上手にならない。

元号は年やリズムの計測法などの一次的な天文学に根ざす暦字に次いで、二次的な記号として掲げられる。権力者は混乱を無くして平和の印を呪(まじな)いに。釜より湯気が、屋上から煙が突き抜け尽きぬ繁盛の兆しを念願に秩序を保守する望み及び実力を表意。エポック(epoque II 抛り所)を指定して、古典の引用を割り当て、市民の感性に作用を及ぼそうとする。あるいは違和感を抱かせ、あるいは無関心も起こす。天明、天正、天永と雖も天文学的な時間よりははるか狭義の時間概念なので、元号は優れて社会的に、政治的に制限される。人間の共同行為、協力もしくは権力関係(推進、勸業、指南)を呼び起こすスローガンは例えば閣議で元号を改める政令のように発布される。「元」の文字通り本質的には前向きの名称で、「旧石器

時代」、「室町時代」、「ワイマール共和国」や、絶対主義、産業革命、ルネサンスの類、つまりは記憶上で技術、国政の場所や制度、社会事情を後からか晚期にいたって纏める呼称とは異なる。

しかし、国民には二次的な時号が必要か。または無い方が良いか。仮に民意が前者に落居したとするならば、いかなる方法で議論し、決定するかは公儀されている。事実、閣議は天皇の存在に執着し、由緒を重んじ、その登位、退位、在位中の希ごとを機にして年次を改める。もし、天皇の地位に関係なく例えば衆議院選挙ごとに、あるいは単に十年ごとにあるいはまた大災害ごとに事始めの宣言を国民が提案、投票などで決定すれば、多くの人々の心情は変わるかも知れない。いづれにしても、国の年号を忌避する人々はいわゆる西洋曆のみ使用する域へ脱出しようとしても、結局キリスト教の伝道に乗り、別種の理念的包括主義に隸属する結果となって、民の由来系統論を中心とする天皇崇拜に代わり、国境を越える特殊な神とその子を祝う信念をとるのである。

そもそも時号を全く無くして、人間文化は有り得るのだろうか。その先例は見当たらない。十二月と言って、繰り返す月は満ち、減る。と言っても、その順序では四季が合わなくなってしまう。例えばナイル川の氾濫が古代エジプト年の原点だが、シリウス出現の日とあい重なり、そして結局ずれてしまった。また、太陽の影を測って、三六〇日に五日を足しても、シリウス出現の日も一年ごとに〇・二五日ずれてしまい、四年ごとの閏年を必要とした。故に四年ごとにより一日が加算される慣例、現在に至る。しかし、安定するような周期性を保証する術はない。原子時計の進む具合（遊離原子の電子遷移周波数）も遅かれ早かれ不精密に終わる。いづこの軌道及び天体とを比べるかによって、多種の周期が生じる。そして観察者が動かざるを得

ない故、そのデータは全く相対的なものになる。重力も、観察の受感もさし止められない。一旦、太陽を一周しても、その円（近代では楕円）を計算した場合、いかでか三六〇度と計測するに至って、いかでか現代までに一時間は六〇分、一分は六〇秒と準え、六十に進む法をとるか。また、どういうわけで一〇〇度、一〇〇〇度と十進法に沿えないのだろうか。単純に言えば、バビロンの六十進法が定着してから根強く尾をひくためである。昔、ある「かのように」から発して伝播した。十二回の満月はまず一年に近づいた計算、一ヶ月も三十日間と見ることから単純な算式。十二×三十は三六〇。この計算法は時間の感覚を司る天の運動学に起因して、優れて三光の現象に沿った精神の写實的働きに由来していると思われる。言い換えれば、たまたま地球、月、太陽の数との相互関係による区分法に過ぎない。仮に地球に月が三つあり、太陽は二つあり、それを地球が8型の線で回るとすれば、人間の時号の数字もかなり異なってくることは想像に難くない。時は生き物の意識というメディアにおいて常に環境に準えられ、相対的である。

果たして絶対的な時間はあるのだろうか。宇宙形成史上、空間と運動が発達して、無限に膨張しつつあると推しても、時間をどのように分けて、測れるのだろうか。原子の構成、素子の構成、電線及び天体の構成、銀河の構成などの多様化を「拠り所」として定義して、その形成過程が描かれる。展望も色々。一途膨張し、進化するか。あるいは周期的に宇宙は縮んでは膨張し直すのか。時間の様を線に準えるやら、円を比喻にするやら。しかも「潮」の *ebb* のように周期性も暗示するが、*Zeit*、*time* などの欧語は「分ける」という動詞を語源とする。「劫波」(*kalpa*) は萬の世が生没する一期の意か。十千十二支のサイクルなどの周回と全く逆に、時間は無限に線が登るかも知れない。末法に至れば、何万年後皆無になるのだろうか。列島国

の元号は天皇の系統がずっとその即位につれて区分され、連綿して一線型として続くのか。イエスに負けず、神武を元の元として、昔生すまで。国を治る兆し、その支配下の者共をおしなべて指導する描写を中心に今後も時の区分を行うのか。あるいは、自由に別の「かのように」を選ぶのか。『摩訶止観』の言葉を借りれば、識別は「実」ではなく、「権」ばかり。人類は相互に意を合わせる一方、解釈の地を余す。個々の信念を包括する概念を生み出そうとしても、なかなかうまくいかない（オイクメネーやユニタリアニズムまたはエスペラントのように）。ひいては、かかる時号そのものを抜きにして人類の同調を測れない限り、莊子のいう「忘年」（人間の時空を超越すること）は難しい哉。

（国際日本文化研究センター教授）